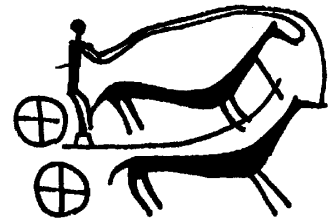


# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター

Newsletter No. 40



特集：2002年度の全学教育（6～11ページ）

生涯学習計画研究部の2年間（3ページ）

いま，大学の革命のときを（5ページ）

（詳しい目次は裏表紙にあります）

## 巻頭言 FOREWORD

### 静かなる大学革命：e-Learning 授業サポーターとしてのネットワーク

高等教育機能開発総合センター助教授 細川 敏幸

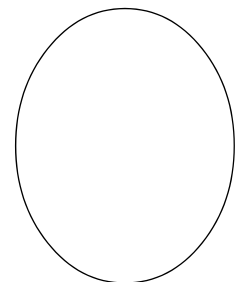
一昨年，米欧の大学初年次理科教育の視察をして，ただものではないシステムがすべての大学で導入されつつあるのを目にしました。急激な勢いで導入されたe-Learningシステムです。代表的なシステムであるWebCTだけでも，現在，世界中で2000を超える大学・機関が採用しています。過去5年間のIT革命は，先進諸国の大学授業を一変させました。それは，単にマルチメディアの一環として，授業にコンピュータを使うことを意味しません。授業にネットワークを組み込んだことに大きな意味があったのです。

これは，これまで無数に試みられ，一般性がないため使われることの少ない，『コンピュータを用いた教育』とはまったく次元の異なるシステムです。教官不在でも教育が進められるシステムではありません。

せん。すべての機能はよりよい授業をサポートするために付加されており，どのような種類の授業にでも利用できます。

#### 利点1：簡単な導入

システムがサポートするのは，基本的に講義用のホームページと電子メール，掲示板です。したがって，学生も先生もホームページ閲覧ソフトとメールソフトがあれば利用できます。それ以外のソフトを新たに購入する必要はありません。講義用の資料はホームページに置きますが，通常のホームページにあるデータならすべて配置することが可能です。また，これは



コンピュータがコントロールする自動教育システムではありません。e-Learningが主に行うのは、学生や教師からのデータの受領と開示です。しかし、このことは逆に、すべての教科で利用できる可能性につながります。

## 利点2：インタラクティブな授業の展開

最も有効なのは、コミュニケーション・ツールとしての利用です。e-Learningでは、教師と学生からなる授業のためのグループが構成され、その間の情報交換は講義時間だけに限られなくなります。学生同士でも、学生から先生へでも、先生から学生へでも、いつでも連絡を取ることができるようになります。この機能が最も有効に働くのは、大人数講義に採用された場合です。これまで、多数の学生に開講された科目で相互のコミュニケーションを取るのには容易なことではありませんでした。しかし、e-Learningシステムを使うことで、このような悩みが解消されます。

## 利点3：講義内容の公開

ホームページにおいた講義資料は、通常、受講者に限定して公開することになりますが、全国に公開することもできます。そうすると、受験生にも他大学の学生にも北大でどんな講義が行われているかが一目瞭然となり、学科選択の強い動機を与えることとなります。一方で、標準化された講義資料がどこかに存在すれば、それを利用することも可能です。これまで、個人に任されていた授業を良くするための資料収集がとても楽になることが期待されます。すでに、MITは講義資料の全面公開に向けて動き出しています。

## 利点4：道内大学の協力の可能性

上手に使えると、このようなシステムでも通信教育に利用することは可能です。道内の大学は、互いに地理的に離れているため、単位互換を設定しても相

互の交流を図ることは困難でした。しかし、e-Learningシステムは1日24時間どこからでもアクセス可能ですから、単位互換のための講義にも応用できます。

## 導入に必要なもの

導入には特殊な備品は必要ありません。ホームページのサーバーが1学部1台あれば、当面は間に合います。ソフトの価格も法外なものではありません。必要なのは、サポートシステムです。最初のソフトの導入、最初の各教官による講義資料のインプットには必ず、サポートが必要になります。誰でも、新しいシステムを利用するには、新しい操作を覚えなければなりません。そのためには、3つのサポートシステムが必要です。第1に、どこかのホームページに使い方が記載されていて、学内のどこからでも参照できなければなりません。第2に、定期的に講習会が開かれ、基礎的な操作方法を習得する機会がある必要があります。第3に専門のスタッフがいて、いつでも相談にのってくれる必要があります。

## 北大がリードできる理由

北大は全国に先駆けて、研究業績やシラバスをホームページに掲載することができました。来年度からは、成績も直接入力することになります(p.11参照)。e-Learningはこの延長上にあり、利用することにそれほどの違いはありません。重要なことは、シラバスや講義資料をあらかじめ公開することの意義を教官全員が理解しているか否かにかかっています。北大は、積極的にFDに取り組み、このことが多くの教官にしみわたるようになってきました。米国にもそれほど遅れているわけではありません。3年の違いなら容易に取り戻せます。高等教育開発研究部では4月からe-Learning研究会を発足し、北大への早期の導入に向けて研究を始めることになりました。世界の標準になりつつあるe-Learningシステムが'03年度から北大でも利用できることをめざしています。その成果にご期待ください。

# 生涯学習計画研究部の2年間

生涯学習計画研究部長 小出 達夫

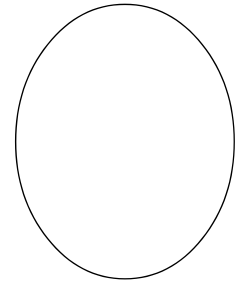
この2年間で反省するため、当研究部とのかかわりで私が関係した諸活動をメモ用紙に書いてみた。するとそこから見えてくるキーワードがいくつかある。順不同でいうと、大学と教育改革、大学と地域社会との連携、大学・高校の接続、生涯学習と一般教育、一般教育とキャップストーン、大学とリエゾン・オフィスなどである。リサーチフィールドは、オレゴン、ポートランド、ワシントン、関西・京都、長崎、埼玉、札幌などである。関係機関は大学・高校のほか、行政機関、各種の企業、各種NPO組織、リエゾン・コーディネイト組織などとなる。私の2年間はこうした用語がイメージする世界とかがわってきたのだが、出発当初スタンスがきまっていたわけではない。おそるおそる試しつつ歩いてきたのが本音である。

## 丹保総長との出会い

私がこのポストを引き受けた当初よく聞いた話は、“生涯学習計画研究部は何をしているかわからない”、“北大にとってどんな意味があるのか”などという類いのものだった。これらの指摘は悪意ではないが、ある意味で私も似たような感想をもっていた。その理由の大半は当研究部についての無知からくるのだが、なおもこの研究部が北大の教育活動に対してどんな役割を果たしているのか、という点については答えを見いだせないうでいた。しかしこの問いは重要な問いであり、その答えを見いだすことは喫緊の要請であった。

上のような疑問をよく呈していたひとが丹保総長その人であったので、私は着任後1ヶ月たち総長室を訪ねた。私の腹も決まりかけていたので意見交流はきわめて率直だった。10分もしないころ、私のイメージを具体化するため、ポートランド州立大学

(PSU)のキャップストーン・プログラムのようなものをしてと言ったら、総長自身も実はそれを考えていた、というのである。私はすっかり驚いた。キャップストーンなる用語を総長が知っているとは思いませんでした。それだけでなくキャップストーンを北大でもぜひやってみようというのだ。それが総長の夢だということだ。偶然意をひとつにしたので私の選ぶ方向はほぼ決まった。これが部長初期のエピソードである。



## ポートランド州立大学とキャップストーン

私が驚いたことは別にもある。部長1年目後半の3月にPSUに行きキャップストーン・オフィスを訪ねた。PSUではこのプログラムを第4学年でやっている。複数学部からきた学生5-10人位がグループを組み、コミュニティの中に派生し、そこから要請された各種の問題を半年から1年かけて調査分析し、資料・データを集め、市民と交流し、問題の解決策や勧告書を作成し、発表するといったものである。オフィスのディレクターと話している時に、このプログラムが大学の一般教育の一部であり、かつその目的が生涯学習者を育てる点におかれていることを知った。一般教育の一部であることはわかっていたが、目的が生涯学習者の形成にあるとはつゆほども思わなかった。そのときの驚きは比較すべくもない。逆にいえば大学で生涯学習に関係するものは、大学の一般教育に関心をよせないといけない、ということである。キャップストーンが当研究部が目指すひ

とつのゴールだとしても、そのことが同時に生涯学習者の養成を意味するとは考えもしなかった。これでほとんど私の方向は定まった。

## 亀野さんに来ていただいて

方向が定まったとはいえ、ただちに実現するわけではない。構想を実現するシステムをつくり、同志をつのり、目的を実現する中身を用意しないとけない。ひとりでは無理だし、研究部の仲間は従来からの仕事を過重なまでに請け負っていた。エネルギーに富み、現実社会をよく知り、広いネットワークをもつ人が必要だった。そんなとき幸い亀野さんを助教教授に採用できた。研究部の新たな第一歩が踏み出された。中心人物が一人であっても相当なことをできる。できるところからやるしかない。当面インターンシップから始め、蓄積をつんでからキャップストーンへと発展させる。今のところはそんなところからやるしかない。そのうちに全学からの支援が得られると思う。独立行政法人になるにしても、またなるからこそ夢をもたないとおもしろくない。

## リエゾン・センターの夢

生涯学習計画研究部は、地域の豊かな教育リソースを発掘し、それを学生の教育と結び付け、教育面での大学・地域連携を充実するといった機能をもたないといけないし、そこに独自の意味がある。そうだとするとこうした機能を維持できるシステムが必要だ。最近よく言われるリエゾン・センターである。このセンターがどんなものかはその機能による。したがって多様な形態があってもいいが、少なくとも教員と職員との共同の場であることが不可欠だ。北大の先端科学技術共同研究センターのリエゾンオフィスもそうになっている。このセンターはテクノロジーの開発を目的として創られたものであり、その面での社会との連携をはかる点に主眼がおかれる。それに対して当研究部の場合は人材開発・教育を主たる機能とした連携機能に責任をもつことになる。この両輪があいまってこそ、北大のリエゾンセンターは意味があるというものだ。この領域もなんとか芽

を出せるようにしたい。これからの課題である。

## 生涯学習者に求められる力と環境

別のはなしになるが、生涯学習に自覚的になるには大学では遅いかもしれない。すでに高校時代の教育においてこのことに教師は自覚的でないとけないだろう。みずからの生活を維持発展させ、自己実現を図るためには、学歴による蓄積では不十分で、生活自体が学習であり、リサーチであり、問題の発見であり、その解決である、といったスタンスが必要で、そのためのスキルが生涯にわたり要求される。こうしたスキルは現在の学校教育では育てられていない。たとえばカナダでは高校・大学をとおしてエンプロイアビリティ・スキルの形成が共通の課題とされている。それはアカデミック・スキル、自己管理スキル (Personal Management Skills)、チームワーク・スキルの3つから構成される。“アカデミック・スキル”は「コミュニケーション」「考える」「生涯にわたって学習する」などの基本スキルで、“自己管理スキル”は「積極的態度と行動」「責任」「適応力」などを要素とし、自己認識、自信、独創性、粘り強さ、目標設定能力・計画管理能力、変化への対応能力などが含まれ、“チームワーク・スキル”は「他者との共同 (Work with Others)」を意味し、組織目標・集団文化の理解、他者の考え・意見の尊重、目標達成のチームアプローチ、集団のリードなどのスキルを含む。これらは一例であるが、例えばこんなスキルの養成が大学や高校には問われている。そのためには大学がもつリソースだけでは対応できない。社会の中にある各種の人的物的リソースとの連携が必要になる。先に触れたリエゾン・オフィスはこうした連携機能を果たせるものとして考えたい。

## さいごに

2年間でできることは小さい。研究部長は臨時雇用みたいなものだからますますそうだ。しかし生涯学習計画研究部の専任教員が3人いるし、高等教育機能開発総合センターには高等教育関係の研究者が9人もいる。これだけ大所帯の研究組織は全国でもまれな組織だ。そしてこの周辺に協力者が集まって

くれば相当なことができる。北大の未来を語るセンターとしてますます力を発揮されることを願ってお

礼のあいさつとしたい。

## いま，大学の革命のときを

入学者選抜企画研究部長 阿部 和厚

北大を今年度いっぱい定年退官となります。入学以来長いときをすごした北大はわが魂のありかです。学生のときには絵のクラブをつくり、よくスケッチしました。5月、オオバナノエンレイソウの花むれる原生林。夏は、緑のエルムの森、広い農場。秋、錦色の木の葉、そして、赤いナナカマド。冬、雪をのせた木の枝の織りなす銀の緞帳。

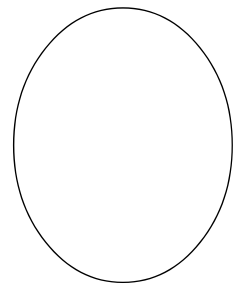
樹々の一本いっぽんが懐かしい。

「医のなかの蛙」が、医からでて大学全体の仕事をするようになったのは、大学放送講座で人体もののテレビ番組をつくるようになってからです。昭和38年来、テレビ番組、ラジオ番組200本以上の制作にかかわり、ここから今日的IT利用授業の創造へと発展できました。また、平成のはじめに医学部の大学院改革、生命医科学研究科インターファカルティ構想の検討に加わりました。平成3年には、医学部6年一貫教育の一般教育カリキュラムをつくり、平成4年から「一般教育等実施体制検討委員会」でカリキュラム、全学教育を検討。この流れで、平成7年に発足した「高等教育機能開発総合センター」の「高等教育開発研究部」の研究員、平成8年から4年間は部長、ついで平成12年から2年間「入学者選抜企画研究部」の部長。一方、平成4年に発足した全学の「点検評価委員会」の専門委員に指名され、

今日まで10年間、この委員を続けました。こうして、これらの役割を互いに関連させながら今日まで、様々な教育改革の仕事を多くの方々とともに進めることができました。

平成4年に医学部で、北大最初の合宿ワークショップ型FD、2泊3日。平成10年には大学全体の1泊2日FD。教育業績評価法、学生による授業評価、全学教育体制、教養教育コアカリキュラム、学生参加型授業、フィールド合宿一般教育演習、AO入試などは北大方式として全国でも目立ち、この数年で全国、外国の大学など、80回ほどの講演に招かれました。こうして、北大の北大らしさ、現代の学生のすばらしさとそれを知る授業での感激、学部をこえた仲間とともにあることの喜びを語ってきました。

いま大学は革命のときという。こんな革命の現場にあって、ともに戦ってきた多くの仲間、お世話になった方々、私を育ててくれた北大に心から感謝します。そして、北大が北大らしい勇気をもってこの革命のときに大きく前進、発展していくことを期待したい。



# 全学教育

## GENERAL EDUCATION

表1 2002(平成14)年度の学期毎の授業開講予定数一覧<sup>1)</sup>

第1学期(授業期間 4月10日(水)~7月22日(月))

月	曜日	月	火	水	木	金	合計	備考
4		2	3	3	3	3	14	
5		3	4	5	5	4	21	
6		4	4	4	3	3	18	
7		4 + 1 <sup>2)</sup>	3	3 - 1	3	4	17	
授業の合計		13 + 1	14	15 - 1	14	14	70	
7			1	1	1			補講期間 試験期間
7~8		2	2	2		1	9	
合計		15 + 1	17	18 - 1	17	15	79	
9			1	1	1	1	4	集中講義 期間

第2学期(授業期間 9月30日(月)~2月3日(月))

月	曜日	月	火	水	木	金	合計	備考
9		1					1	
10		3	5	5	5	4	22	
11		3	4	4	4	5	20	
12		3 + 1 <sup>2)</sup>	4 - 1	3	3	3	16	
1		2	2	2	2	2	10	
2		1					1	
授業の合計		13 + 1	15 - 1	14	14	14	70	
1			1	1	2	1	5	補講期間 試験期間
2		2	1	2	2	2	9	
合計		15 + 1	17 - 1	17	18	18	85	

注) 1. 公の行事の日数は授業数から除かれている。

?6月6日(木)開学記念行事日, ?6月7日(金)大学祭, ?1月17日(金)センター試験の準備

2. 月曜日の不足を補うために下記の日に月曜日の授業を実施する。

?7月17日(水), ?12月24日(火)

表2 年度はじめの履修調整日程

月	日(曜日)	事項
2	下旬	学部学生に対し, 履修調整の実施及び履修届提出関係の周知
3	22(金)	クラス担任会議(履修調整の実施, 新入生への周知)
4	5(金)	新入生オリエンテーション(履修調整の実施を文書で新入生へ周知)
	10(水)~11(木)	一般教育演習履修希望調書受付(共通教育掛) (大講義室及びS2講義室の履修調整も同時に実施)
	12(金)	一般教育演習履修希望調書データ入力及び結果出力
	15(月)~16(火)	一般教育演習履修許可一覧の掲示及び追加履修受付
	17(水)~18(木)	履修届受付
	19(金)~23(火)	履修許可票の入力及び履修届データ入力(外注)
	24(水)	科目毎の履修者数リストの出力 講義室調整。収容不可の場合は電算により許可者決定
	25(木)	履修許可者名簿及び各授業科目の履修可能数一覧の掲示
	25(木)~26(金)	一般講義科目の追加履修届受付・入力
5	7(火)	履修届確認表及びエラーリスト出力
	8(水)	履修届確認表の配布
	9(木)~13(月)	履修登録修正・変更
	14(木)	履修登録完了

表3 2002(平成14)年度全学教育部行事予定表

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
3月	22(金)	クラス担任代表会議	
4月	5(金)	新入生オリエンテーション	
	8(月)	入学式	
	9(火)	学部ガイダンス	
	10(水)	第1学期授業開始	
	17(水) ~ 18(木)	1年次履修届受付	
		2年次以上履修届受付	当該学部
	18(木)	追加認定試験成績締切	
5月	上旬 ~ 下旬	定期健康診断	
6月	6(木)	開学記念行事日	休講
	6(木) ~ 9(日)	大学祭	休講
7月		【17(水)に月曜日の授業を実施】	
	23(火) ~ 25(木)	補講日	
	26(金)	第1学期授業終了	
	29(月) ~ 8月8(木)	定期試験	
8月	9(金) ~ 13(火)	追試験	
	9(金) ~ 9月27(金)	夏季休業日	
	29(木) 正午	定期試験及び追試験成績提出締切	
9月	中旬 ~ 下旬	学科等分属手続	当該学部
	集中講義期間	集中講義期間	
	30(月)	第2学期授業開始	
10月	9(水) ~ 10(木)	1年次履修届受付	
		2年次以上履修届受付	当該学部
	10(木)	追加認定試験成績締切	
11月			
12月		【24(火)に月曜日の授業を実施】	
	25(水) ~ 1月8(水)	冬季休業日	
1月	9(木) ~ 10(金)	補講日	
	14(火)	授業再開	
	18(土) ~ 19(日)	大学入試センター試験【17(金)休講】	
2月	3(月)	第2学期授業終了	
	4(火) ~ 17(月)	定期試験	
	19(水) 正午	定期試験成績提出締切	
	18(火) ~ 20(木)	追試験	
	21(金) 正午	追試験成績提出締切	
	25(火)	北海道大学第2次試験(前期日程)【予定】	
3月	12(水)	北海道大学第2次試験(後期日程)【予定】	
	中旬 ~ 下旬	学科等分属手続	当該学部

表4 2002(平成14)年度全学教育科目における各部局の授業担当状況



表5 2002(平成14)年度全学教育科目における各部局の授業担当状況(続)

# 補正予算でN棟の改修工事

## 全学教育委員会開催される

2月21日(木)に第43回(平成13年度第5回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合われました。

議題1. 平成14年度全学教育科目に係るTA任用予定者について

議題2. 流用定員解消に伴う全学教育(実験系)に関するWGからの報告について

議題3. その他  
学生委員会委員および付属図書館北分館委員の推薦について

報告事項1. 平成14年度全学教育科目の追加開講及び変更等について

報告事項2. 平成14年度第1学期の履修調整について

報告事項3. N棟改修工事について

報告事項4. 視聴覚機器(VTR, 資料提示装置等)の整備について

報告事項5. 英語検定試験の単位認定について

報告事項6. 平成14年度全学教育科目に係る既習得単位の認定について

報告事項7. 全学教育委員会の検討事項について

報告事項8. クラス担任会議について

報告事項9. 全学教育科目のシラバス入力について

報告事項10. 教官による成績の直接入力について

議題1では、各部局より推薦のあったTAの任用予定者について諮られ、審議のうえ了承されました。

議題2では、流用定員解消に伴う全学教育(実験系)に関するワーキンググループの答申について、渡邊センター長補佐より報告がありました。WGでは、自然科学実験および心理学実験について、北海道大学と他大学の実施状況、高校の理科の現状など様々な角度から検討をおこない、その結果として「科学実験研究部の設置」という提案が出されました。この提案について質問、意見などが出され、1時間ほど議論がおこなわれ、各委員がそれぞれの部局に

持ち帰って報告することとなりました。

議題3では、全学教育委員会から出ず委員について、委員の半数が交替することでもあるので、後任については委員長に一任していただきたい旨の提案があり、了承されました。

報告事項1では、全学教育科目の追加1科目、担当者の変更2科目についての報告がありました。

報告事項2では、平成14年度第1学期の履修調整を、平成13年度と同様に行いたい旨の申し出があり、具体的な日程や方法についての報告がありました。

報告事項3では、第2次補正予算でN棟の改修工事が認められたこと、平成14年4月から12月中旬にかけて工事を行うこと、教室への通路を確保するために工事を4月以降と6月以降の2次にわけること、騒音のでる工事は、授業に支障のないように休日にしてもらうことなどが報告されました。また、この工事によりN302, N304講義室が第1学期に使用できなくなるので、水曜の2講時のように授業数の多い時間帯には、教室の借用や曜日講時の変更で対応せざるを得なくなる場合の協力の要請がありました。

報告事項4では、教育研究基盤校費保留分から全学教育の講義室の視聴覚機器整備のための経費23,643,000円が認められたこと、この整備によりE棟の講義室の視聴覚機器が均一化され、履修調整で教室変更がスムーズにおこなえるようになったこと、S棟の講義室については平成14年度に要求したいことが報告されました。

報告事項5では、英語検定試験としてTOEFL・ITPを全学生に受験させ、これを単位として認定することについての、WGおよび言語文化部の英語系での検討の結果についての報告がありました。

報告事項6では、既習得単位の認定を例年通り行うことが報告されました。

報告事項7では、全学教育委員会の検討事項について、平成13年度に何がどこまで達成されたかの報

告がありました。

報告事項8では、クラス担任代表者会議及び全体会議について、3月22日の午前と午後に行うこと、担任教官のオフィスアワーの実施を要請すること、小林理子保健管理センター講師による講演「大学生のメンタルヘルス - プライマリケアについて考える -」を予定していることなどが報告されました。

報告事項9では、全学教育科目のシラバス入力が2月20日現在で2070件99.3%であり、まだ15科目が未入力であることが報告され、入力期限は12月末であり、共通教育掛から督促を受けてから入力することのないように、教授会などで呼び掛けてほしいむね

の要請がありました。

報告事項10では、教官による成績の直接入力平成14年1学期から始まること、試行を平成13年度第2学期に行い、試行の協力教官に対する説明会を2月19日及び20日に行ったことが報告され、テスト用の「利用者マニュアル」が資料として配付されました。成績の直接入力は、非常勤講師についても例外なく実施されることとなっていますが、非常勤講師の多い語学や基礎科目では、世話教官の負担が大きくなるので、その点についての配慮をしてほしいという発言が、言語文化部の竹本委員からありました。

(植木迪子 文学研究科教授・センター長補佐)

## センター CENTER

# 2001年度高等教育機能開発総合 センター発表会開催される

2月13日(水)の午後情報教育館4Fの共用多目的教室(2)において、全体テーマを「大学教育改革の課題と展望」として、下記のように発表会が開催されました。

### 第1部 高等教育フォーラム

「北海道大学における教育改革の課題と展望・・・退官にあたって・・・」

#### 1) 大学教育における地域連携と生涯学習の課題

小出 達夫 生涯学習計画研究部長

#### 2) F Dと学生参加型授業、そして今後

阿部 和厚 入学者選抜企画研究部長

(前高等教育開発研究部長)

### 討 論

司会 山岸 みどり 入学者選抜企画研究部 教授

町井 輝久 生涯学習計画研究部 教授

### 第2部 講演と討議

「見果てぬ夢を追って・・・リベラルエジュケーション、ジェネラル・エジュケーション、教養教育・・・」

吉田 文 メディア教育開発センター助教授

### 討 論

司会 小笠原 正明 高等教育開発研究部長  
第3部 「研究部活動から見た大学教育改革の課題」

#### 1) 高等教育開発研究部

「研究プロジェクトの総括と展望」

小笠原 正明 教授

#### 2) 生涯学習計画研究部

「大学教育におけるインターンシップ」

亀野 淳 助教授

#### 3) 入学者選抜企画研究部

「200X年のAO入試はどうなる」

鈴木 誠 助教授

司会 西森 敏之 高等教育開発研究部 教授

小出教授と阿部教授は、各研究部に関わりを持つきっかけから現在の状況、さらには将来展望まで講演し、日本の高等教育と生涯学習の概観をすることができました。吉田助教授は、教養教育の重要性を述べるとともに、最近この分野で成功しているポー

トランド州立大学を例にあげ、教養教育の近代的な展開方法について講演しました。

第3部では3研究部の今年の活動をそれぞれの担当者が解説しました。高等教育開発研究部は実現に向けて研究の進んでいるプロジェクト、「コア・カリキュラムに芸術とSTS(科学・技術・社会)科目を導入する研究」を中心に総括しました。生涯学習計画研究部はインターンシップについての聞き取り調

査とアンケートから、その現状と今後を概括しました。入学者選抜企画研究部は、現在のAO入試を分析し将来の理想的な形態を発表し、北大のAO入試の未来を展望しました。これまで、研究部の発表会は、スタッフの研究発表でしたが、本年度はグループとしての報告を重視しました。そのため、各研究部の組織としての活動がよくわかるようになりました。

## 高等教育

HIGHER EDUCATION

### 大学教育におけるIT利用に関する シンポジウム開催される

2月8日午後、情報教育館4F多目的教室(1)において下記のシンポジウムが開催されました。

講演1:「教育・学習におけるITの総合化をどのようにはかるか?」

マドフミタ・バハタチャリヤ博士  
シンガポール・ナンヤン工科大学  
国立教育研究所

講演2:「ニューメディアとインターネットでできたグローバルな空間による教育機関の強化と「学習文化」の新しい方向」

ピエト・コマース博士  
オランダ・トエンティ大学科学教育学部

巻頭言にもありますように、過去5年の間に、世界的な規模で、IT技術の大学教育への導入がはかられています。これは、従来の『教育にコンピュータを利用する』動きとは全く異なるものです。最近ハードウェア上の問題が解決されたために、自由な発想で理想的なシステムが作成できる時代になりました。このシンポジウムでは、大学教育におけるIT利用の最前線について議論しました。おもしろいことに、講演や議論の中で重要だとされたのは、IT技術そのものではなく、教育のコンテンツの質や、グループ学習、ヴァーチャルではなく本物に対峙するような教育でした。

## 高等教育フォーラム

### 「大学教育改革と地域連携」開催のお知らせ

今後、高等教育システムは、地域の人材開発のためにこれまで以上に重要な役割を果たすと予想されています。また、そのため地域の高等教育機関を結びエリア・ネットワークの構築が望まれています。

このような情報ネットワークは、学校間の情報格差をなくすだけではなく、個々の教育現場、すなわち授業におけるコミュニティーづくりを助け、それを活性化するという機能があります。単に授業にメディ

アを取り入れるというレベルを越えたインパクトを、高等教育にもたらしつつあります。次回の高等教育フォーラムでは、このような観点から以下の要領で講演を企画しています。多数の学内外の教官のご参加をお待ちしています。

日時：2002年3月27日（水）午後2時～5時

場所：北海道大学情報教育館4F多目的教室(2)

060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

概要：

午後2:00-3:15

「教養教育と地域連携（仮題）」

国際基督教大学・学長

絹川 正吉

午後3:30-4:45

「ゴーイングシラバスでe-Learningはどこまで可能か?」

名古屋大学大学教育研究センター 教授

池田 輝政

午後4:45-5:00

総合討論

主催：北海道大学高等教育機能開発総合センター

高等教育開発研究部

連絡先：電話：011-706-7515（小笠原）

e-mail: thoso@high.hokudai.ac.jp

## 生涯学習

LIFELONG LEARNING

### 生涯学習計画セミナーが開催される

生涯学習計画研究部が主催する公開講座「生涯学習計画セミナー」が2月15日から3月2日までの10時間にわたって開催されました。自治体や高等教育機関の生涯学習担当者を対象に、今日の生涯学習政策や、生涯学習計画づくりの動向や大学と地域の連携のあり方について学びあうものです。講師として生涯学習計画研究部の専任教官のほか、教育学研究科の姉崎洋一教授、宮崎隆志助教授、北海学園大学の山田定市教授があたり、道民カレッジや市町村における生涯学習計画の実践についてパネルディスカッショ

ンを行いました。

また、札幌市と連携する生涯学習事業として「さっぽろ市民カレッジ」に「高齢者の学習と社会参加のためのファシリテーター養成講座」（2月7日～3月7日5回）を生涯学習計画研究部の木村純教授がコーディネーターとなって、「ちえりあ」を会場に開講しました。今後ますます重要となる高齢者の組織化活動をすすめる際に、高齢者をどのように理解し、受容すべきかについて学ぶものです。

### 生涯学習フォーラム（第4回）高等教育と インターンシップ ドイツと日本 を開催します

本学をはじめ我が国の大学や高校でもインターンシップについての関心が高まっています。しかし我が国ではインターンシップの教育的な位置づけや体系化も遅れています。今回の生涯学習フォーラムで

は、職場実習と学校教育の結合が早くから進んでいたドイツの最近の動向と我が国の大学等でのインターンシップへの取り組み動向を比較検討しながら、大学等におけるインターンシップのあり方について討

論を行います。

講師の名古屋大学教授の寺田盛紀教授は「ドイツの職業教育・労働教育 インターンシップ教育の源流」(大学教育出版 2000)など、多くの関連する著作・論文がありこの分野の第1人者です。

北大が事務局となり運営される「北海道地域インターンシップ推進協議会」(仮称)もまもなく発足します。多くの方々がこのフォーラムに参加し、本学におけるインターンシップのあり方についての討論に加わっていただくことを希望します。

日時：平成14年3月7日(木)午後4時30分～6時30分

場所：北海道大学情報教育館4F多目的教室

フォーラムの概要：

講演「ドイツの教育とインターンシップ」

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

寺田 盛紀 教授

報告「我が国の大学等におけるインターンシップの現状と課題」

生涯学習計画研究部 亀野 淳 助教授

## 入学者選抜

ADMISSION SYSTEMS

### 来年度の北大地区説明会の準備進む

入学者選抜企画研究部では、年明けから本年度2回目の高等学校訪問を進めています。今回は道外も含め、延べ120校の訪問が3月上旬に終了します。

今回の訪問のねらいは、昨年旭川と帯広で行われた地区説明会の継続開催の打ち合わせと、今まで実施されていた函館キャンパスオープンユニバーシティの発展的解消に伴う地区説明会の実施、またAO入試や大学広報に関する情報交換にあります。

昨年旭川と帯広で行われた地区説明会では、延べ1100名の高校生や保護者、教諭が参加しました。講義の内容も工夫され、また直接北大の先生の話が聞けるとのこともあり大変好評でした。終了直後から、来年度も継続して欲しいとの依頼があり、現在実施の方向で調整に入っています。

また、函館地区では、進路指導の中心となる6校の進路部長と意見交換を行いました。今までの函館キャンパスオープンユニバーシティは、実施時期の問題や宣伝不足から多くの参加者を得ることができませんでした。しかし、来年度実施予定の地区説明会については、函館地区の各高等学校から大変前向きな回答を得ることができました。また、多数の高校生や保護者の参加も見込めることがわかりました。現在、先行する他地区とは異なった、新しい形の説明会の実施に向けて高校側との調整に入っております。このほか、釧路地区ではP.T.A.の協力を得て、市民会館を利用した「北大の魅力を語る(仮称)」という説明会も予定しています。

## アドミッションセンター 講演と討論の集い

### 「面接研究の動向と課題」開催される

大学入試の多様化とともに、受験生の意欲や適性を調べる手段として面接が重視されています。北海道大学においても、後期日程（医学部など4学部）やAO入試で面接が課されています。しかし、面接の有用性については、実務家と研究者の意見の間には大きな隔たりがあるのが現状です。入学者選抜企画研究部は、2001年10月4日に企業の人事担当者による講演と、本学入試で面接を実施している学部間の交流を目的として「面接シンポジウム」を開催しました。その続編として、2月22日午後、情報教育館4F多目的教室(1)において、採用や昇進における多面的評価に関する研究に取り組まれている南山大学総合

政策学部の高橋潔助教授を講師として、面接研究についての講演と討論の集いを開催しました。採用面接に関する科学的知見のほとんどは欧米の研究によるものですが、日本でもようやく最近実証的な研究に対する関心が出てきたところだそうです。高橋氏の講演の後、大学入試の面接に関する実践的及び理論的な課題についての活発な討論が行われました。

入学者選抜企画研究部は、これからも大学入試や採用選抜における新しい評価方法に関するトピックスを取り上げて、「アドミッションセンター講演と討論の集い」を開催する予定です。ご興味をお持ちの方は気軽にご参加下さい。

## センター日誌

CENTER EVENTS, December - January

### 12月

- 4日
  - ・（行事）北大説明会（札幌南高校）
  - ・（行事）ポートランド州立大学と北海道大学のジョイントシンポジウム
- 5日
  - ・（会議）第18回教務委員会
- 6日
  - ・（研究会）高校間格差に関する研究会
- 7日
  - ・AO入試合格者発表
  - ・（行事）北大説明会（札幌予備学院）
- 10日
  - ・（会議）第6回SCS事業専門委員会
  - ・（会議）第19回高等教育開発研究委員会
- 12日
  - ・（行事）北大説明会（札幌東高校）
  - ・（訪問）栗山中学校来学
- 13日
  - ・（連絡会）わがソニール・ソニール・体験入学担当教官連絡会
- 14～20日
  - ・AO入試入学手続き期間

- 17日
  - ・（会議）第88回全学教育委員会小委員会
  - ・（研究会）入試改革研究会
- 19日
  - ・（会議）第42回センター運営委員会
- 21日
  - ・（会議）第25回公開講座専門委員会
- 25日
  - ・センターニュース第39号発行
  - ・（行事）Z会主催「難関大学フェア2001」（東京）

### 1月

- 8日
  - ・（会議）第68回センター教官会議
  - ・（会議）平成13年度第1回センター点検評価委員会
- 17日
  - ・（訪問）京都府嵯峨野高校来学（総長講義）
- 18日
  - ・（会議）第26回公開講座専門委員会
- 22日
  - ・（会議）第89回全学教育委員会小委員会
- 30日
  - ・（会議）第27回公開講座専門委員会

# 行事予定 SCHEDULE, March - May

	【日(曜日)】	【行事】	【備考】
3月	12(火) 中旬～下旬	北海道大学第2次試験(後期日程) 学科等分属手続	当該学部
	22(金)	クラス担任代表会議・クラス担任全体会議	
4月	5(金)	新入生オリエンテーション	
	8(月)	入学式	
	9(火)	学部ガイダンス	
	10(水)	第1学期授業開始	
	17(水)～18(木)	1年次履修届受付 2年次以上履修届受付	当該学部
	18(木)	追加認定試験成績締切	
5月	上旬～下旬	定期健康診断	

## センターニュース 2002, No. 40 目次

巻頭言 .....	細川 敏幸 ..... 1	大学教育におけるIT利用に関する シンポジウム開催される .....	12
生涯学習計画研究部の2年間 .....	小出 達夫 ..... 3	高等教育フォーラム「大学教育 改革と地域連携」開催のお知らせ .....	12
いま、大学の革命のときを .....	阿部 和厚 ..... 5	生涯学習計画セミナーが開催される .....	13
2002年度の学期毎の授業開講予定数一覧 .....	6	生涯学習フォーラム：高等教育とインターン シップ ドイツと日本 を開催します .....	13
年度はじめの履修調整日程 .....	6	来年度の北大地区説明会の準備進む .....	14
2002年度全学教育部行事予定表 .....	7	アドミッションセンター講演と討論の集い 「面接研究の動向と課題」開催される ....	15
2002年度全学教育科目における 各部局の授業担当状況 .....	8	センター日誌 .....	15
補正予算でN棟の改修工事 .....	10	行事予定・目次・編集後記 .....	16
2001年度高等教育機能開発総合センター 発表会開催される .....	11		

### 編集後記

センターは間もなく発足8年目を迎えます。高等教育開発研究部長、入学者選抜企画研究部長を務められた阿部和厚先生が退官されます。大学放送講座、FD、学生参加型の講義など大学としての新しい試みの先頭に立って下さいました。生涯学習計画研究部長の小出達夫先生も退官されます。大学が地域社会と連携し、生涯学習者として学生を育てることを生涯学習計画研究部が実践的に研究していく方向がスタートしています。お二人の貢献もあってセンターの三研究部の協力と連携がますます強まった2001年度でした。(木村)

### センターニュース 第40号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2002年2月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話(011)716-2111・FAX(011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・細川敏幸・

町井輝久・植木迪子・山岸みどり・鈴木誠・

池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは 印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX(011)706-7521

インターネットホームページ：http://infosys.academic.hokudai.ac.jp/center